

学習内容報告書 フォーマット

学校名	北海道標津高等学校
授業者	鈴木祐二

1. 単元計画

1-1. 単元名

カレイ釣獲調査・鯨類観察 兼 海洋教育パイオニアスクール単元開発教職員海洋実習

1-2. 学年

2 学年 参加希望教職員

1-3. 教科（単元を実施する教科を全てお書きください）

自然環境系科目

1-4. 単元の概要

身近な水産資源であるカレイ類に注目し、標津沿岸で漁獲できるカレイ類を調査する。さらに、魚類の分類、解剖を行うために各自でサンプルを釣獲で調達する。

釣りというレジャーを通して海洋に親しむ態度を育成し、さらに乗船し沖合へ出ることによって海の楽しみを実感する。さらに、乗船中は、海鳥類の観察やイルカやクジラを観察し、オホーツク海根室海峡の雄大な自然を体感する。また、海洋に漂う海洋プラスチックにも注目し、海洋環境問題についても考えるきっかけとする。

教科横断的な海洋教育の推進のため他教科の教員にも参加を促し、海からの視点を各自の教科に落とし込むための研修の場として提供する。

1-5. 単元設定の理由・ねらい

- 1 標津沖で漁獲される主要水産生物であるカレイを釣獲により採集し、生態を学ぶことから標津沖の海洋環境を考え、持続可能な資源の利用について考える。（自然環境系科目）
- 2 海洋レジャーを楽しむことで海に親しみを感じ、海の豊かさを実感することで海洋環境保全に向けて進んで取り組む姿勢を身につける。（海洋教育パイオニアスクール単元開発）
- 3 教科横断的な海洋教育の構築に向けて教職員の研修を実施する。

1-6. 育みたい資質や能力、態度

- ・海に親しみ楽しむ態度や率先して海洋環境を保全していこうとする行動力。
- ・身近な海の資源の豊かさを実感し、海と陸の繋がりを理解し、海の豊かさと陸の豊かさを合わせて環境を守る態度。
- ・主要な魚類であるカレイを解剖学的、生態学的側面から理解し、持続可能な資源管理について考える。

1-7. 単元の展開（全5時間）

時数	学習活動・主な内容	教師の指導 / 主な評価 外部連携 / 使用教材等
4	<p>カレイ釣り実習</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 港集合 安全確認、ライフジャケット等着用 道具の運搬 ・ 出港 沖合にて鯨類・海鳥の探索 ・ 釣獲実習 餌の付け方（アオイソメ） 竿・リールの取り扱い あたりの取り方 魚の外し方（とげのある魚類に注意） ・ 帰港 片付け 魚の仕分け 	<p>集合時間と場所の確認</p> <p>事前に餌の用意 仕掛け作りは、放課後有志生徒で実施</p> <p>外部協力 船舶協力 船長の家 戸村氏</p>
1	<p>解剖実習</p> <p>冷凍保存しておいたエゾメバルの解剖。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 外部形態の観察と分類 ・ 図鑑での分類方法を学習 ・ 棘の特徴を観察 	<p>外部形態がわかりやすいエゾメバルでの解剖を行う</p> <p>近縁種との分類を図鑑を用いて行う。</p> <p>頭部の棘を用いた分類で種を判別する</p>

2. 学習活動の実際

2-1. 単元における位置づけ

単元 時間中の 時間目

※例：単元 10 時間中の 2 時間目 / 単元 15 時間中の 4, 5 時間目

2-2. 本時の目標

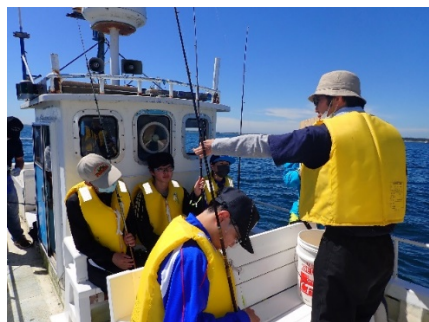
カレイ釣り・乗船実習・分類・解剖

・標津沖で漁獲される主要水産生物であるカレイを釣獲により採集し、生態を学ぶことから標津沖の海洋環境を考え、持続可能な資源の利用について考える。

・海洋レジャーを楽しむことで海に親しみを感じ、海の豊かさを実感することで海洋環境保全に向けて進んで取り組む姿勢を身につける。

2-3. 本時の展開

主な学習活動 / 反応	教師の指導・支援 / 評価の視点 (方法)
カレイ釣り・乗船実習 (4時間) <各自で標津港へ集合> 乗船前にあいさつ 乗船に向けて注意事項 <乗船～下船> 安全確認をしながら、沖合へ ・海鳥類の観察 ・イルカの観察 ・準備ができ次第、釣りを実施 ・片付け 帰港後 <分類解剖> ・釣り上げた魚を大まかに分類する	事前準備 ・船の手配 ・仕掛けの準備 実施当日 ・生徒の安全確認 ・教員研修としての海洋教育の実施 ・解剖用魚は冷凍保管 仲間と協力して釣りを楽しむことができているか確認する。 魚を持ち帰り、食することを推奨する。



3. 今回の活動の自己評価

学校行事の都合で夏季の実施となり、カレイのシーズンを終えてしまっていたが、小型のカレイを釣ることができた。また、カレイ以外の魚種（カジカ類、メバル類）もサンプリングできたため、カレイ以外の魚種についても学ぶことができた。根室海峡の魚種の多様性を理解する一環となった。海に親しむという点では、ホエールウォッチング同様に楽しみながら海に親しむことができる授業である。興味関心を高める効果は高いと感じる。また、釣りを通して仲間と協力する姿勢や命を大切にすることを育むことに繋がった。

4. 今後の課題

身近な魚をいかに探究活動に繋げるかという工夫がさらに必要であると感じる。生徒の発見から始まる探究活動ができるようになるとさらに良いと感じる。教職員の海洋研修を兼ね行ったがそれぞれの教科の特性を活かした教育活動へ繋がることを期待したい。天候的に、7～8月に実施する方が天候が安定しているため良いのではないかと。

5. 本学習内容報告書活用にあたっての留意点